希望を生きる移民 1.5 世

――在日カンボジア人 1.5 世の語りから

濱　野　敏　子

序章

1　カンボジア難民との出会いから移民への関心へ

筆者は，かつて支援活動に赴いたタイ国境のカンボジア（避）難民キャンプで，祖国の混乱を逃れ安全を求めて国外を脱出した人々と出会った。難民となった背景には，東西冷戦下で大国の代理戦争となったベトナム戦争のあおりをうけて荒廃したカンボジアの国土と社会，その後に成立した過激な共産主義政権による人心の破壊，そして政権崩壊後に起こった新政府と旧政権による内戦という繰り返される戦争の歴史があった。この大きな物語の中で翻弄されたのが小さな民だった。筆者は，難民となった人々と共に生活する中でさまざまなことを見て聞いた。そこには想像を超えた出来事や物語があった。そのような中で，生きるとはどういうことか，難民となって他国で暮らすとはどういうことか，難民とならなかった自分は何者か，パスポートを持つことの意味，難民と私はどのようにつながっているのかなどについて考えた。そして，第 3 国への定住が許可され，新しい人生に向かって他国へ移動していく彼らの幸せを願わずにはいられなかった。その出会いから 30 年近く経って，海外での仕事を終え日本に帰国した筆者は，外国にルーツを持つ住民たちの厳しい生活状況と彼らに対する日本政府の冷たい対応を見た。そして，日本に定住し暮らしているカンボジア難民やその他の移民の生活はどうなっているかと心配になった。彼らは日本に移住したことや日本で暮らすことをどのように捉えているのか，将来どのように生きたいと願っているのかと考え始めた。なぜなら，これら移民や難民たちの状況は日本社会のあり方を反映し，日本人にとっては今後の社会をどのように構想するかという課題がそこにはあるからである。

なお，日本政府は「移民」という言葉を決して使わないが，他国から来て日本で生活する人は，在留資格に関わらず，また限定的な期間であっても日本社会における住民であるという認識のもと，本論では「移民」という言葉を用いる。また，移民には家族移民や難民が含まれる。

2　移民 1.5 世への問題関心と研究の視点

移民といっても，成人して移住する人と子どもとして移住する人では，その移住経験は異なる。事情もわからぬまま保護者に連れられ未知の世界に突然放り込まれた子どもの場合，不確実な状況の中で様々なリスクにさらされる。一方で，未知の世界は子どもたちに新しい可能性を提供し，より良い自分の将来を構想できる領域である。受け入れる社会にとっても，子どもの移住者がどのような将来を実現していくかは，リスクであり可能性である。移民 1.5 世の生き方は，社会にとっても重要な関心事となる。

従来の移民 1.5 世の研究における主題は，異文化社会に参入した子どもがどのように社会に適応するか，どのように社会関係資本を持つかが中心であった。それらの研究や報告によって，社会の 1.5 世への認識は促進し，そのことによって学校や社会の制度において改善がはかられてきた。一方で，移民 1.5 世の一人の人間としての生き方という視点からの研究は多くない。移民 1.5 世は，マジョリティとは異なる経験を通して，彼／彼女らなりの生きる知恵を生み出している。これまでの移民 1.5 世の「困難な状況にある移民の子ども」という言説から，「移民という経験をへて，生活の知恵を獲得し，自己を形成してきた人間」に視点を移行して，その知恵と生成プロセスを学ぶことを本論は意図している。それは，これまでとは違った移民 1.5 世の現実を理解することにつながり，また彼／彼女らの生き方が多民族化する日本社会において新しい生活の仕方や価値観を示唆する可能性があるからである。

移民という背景の中で生活の知恵を獲得していく人々に注目するときに，宮崎の提唱する「希望メソッド」という概念が有用である。宮崎によると，「希望メソッド」とは，知の方向転換である。知の方向転換とは，より良い生を求めて，他者と関わり，新たな自己を発見・構築していくプロセスである。その自己は固定されず，常に変化し続ける。その変化の原動力が，知の方向転換＝希望である。過去にあった〈もう―ない〉ものを求める生き方ではなく，未来の〈まだ―ない〉ものに向かう生き方である（宮崎，2009）。

3　本論の目的と方法

本論は，思春期以前に日本に移住したカンボジア人 1.5 世の語りを通して彼らの生活世界を理解することを意図する。具体的には彼／彼女らと異質な他者との関わり合いに焦点を当て，その関係性を明らかすることを目的とする。カンボジア人 1.5 世は日本社会において，どのような人とどこで出会い，どのような関係を持ち，どのように自分の人生の糧としているのかという問いを立てる。これらの問いを，カンボジア 1.5 世への対話的インタビューを通して探り，語り手である 1.5 世（調査協力者）と聴き手である調査者との協働による知の形成を意図する。

在日カンボジア人 1.5 世の生活世界を探究する理由は，彼／彼女らが 1990 年前後に日本に移住したニューカマーの子どもの先陣として，均質的傾向の強い日本社会において異質な

外国人として様々な困難に直面し，そのことによって日本社会に多様性や共生の問題を提起すること，そして壮年期に入った現在，過去の体験を意味づけ，経験として語ることができるステージに達しているからである。

本論でいう「異質な他者」とは，カンボジア人 1.5 世の側から見た時の他者であり，マジョリティの日本人やその他の国籍や文化・社会的背景の異なる人を含む。

第 1 章　概念，背景，先行研究

1　移民 1.5 世の概念

移民 1.5 世という概念は，移民学者であるルンバウトがアメリカに移住したインドシナ難民の適応に関する研究において，同じインドシナ難民であっても移住期に成人であるか子どもであるかによって，その適応形態や生活経験には大きな違いがあり，同様に分析することはできないということから提唱した（Rumbaut，1991）。移民 1.5 世は，出身地の言語を母語とし，生活習慣や社会規範などの文化を身につけた上で移住し，移住先で新たに言語や文化を学び直し，アイデンティティを形成していく。移民 1.5 世の経験は，母国で確立したアイデンティティを維持したまま生きる 1 世とも，また移住先で生まれ育ち移住先の文化の中でアイデンティティを確立する 2 世とも異なり，移民 1.5 世は二つの文化の挟間でアイデンティティを形成する。移民 1.5 世の定義には確立したものがあるわけでないが，アイデンティティ形成と社会化の視点から，本論では思春期以前に移住し移住先の学校教育[1] を受けて成長する人とする。

なお，本研究の対象は移民 1.5 世であるが，以下の先行研究においては移民 1.5 世と移民 2 世を含む「第 2 世代」と呼ばれる人々を対象とした研究を含めて検討する。また，移民 1.5 世の子ども時代を主テーマとする研究においては，「移民の子ども」，あるいは「外国にルーツを持つ子ども」という呼称を用いた人々についての研究を含めて検討する。

移民 1.5 世に関連する社会学的研究の文献として，アメリカの移民研究者であるポルテスとルンバウトによる『現代アメリカ移民第 2 世代の研究』（ポルテスとルンバウト，2001＝2014）があげられる。この研究の目的は，アメリカの新移民（1970 年代以降の主に中南米やアジアからの移民）第 2 世代の社会的適応プロセスを分析し，彼／彼女らの将来のあり方を予想することである。ここで言う第 2 世代とは，移民 2 世と移民 1.5 世（主にインドシナ難民）を含む。研究に至る問題関心は，アメリカを人生の生活拠点として生きようとする第 2 世代がどのようなエスニック・コミュニティを形成していくかにある。それは，アメリカ社会に重要な影響を与えるということである。新移民第 2 世代の適応は，かつてのヨーロッパ移民のような単線で直線的なものではなく，複雑で多様な過程と形態を取り，これを「分節化する同化[2]」と称する。分節化要因として，1）人的資本（学歴，職業，言語といった

個人的属性） 2）ホスト社会の受け入れ体制（移民政策や人々の意識） 3）家族構成（両親か片親など）をあげ，その社会文化的適応の型を「不協和型文化変容（親はアメリカ文化を習得せず，子どもは母国文化を喪失し，親子間で文化の不協和）」「協和型文化変容（親子ともにアメリカ文化を習得し，母国文化を捨て去る）」「選択型文化変容（エスニック・コミュニティに繋がることで，主流文化を習得しつつ，母国文化を選択的に保持）」と分類し，「選択型文化変容」が個人的にも社会的にも恩恵が大きいと主張する（ポルテスとルンバウト，2001＝2014）。これは 20 年前のアメリカの新移民第二世代についての枠組みあるが，現在の日本の新移民第 2 世代の状況と類似点が多く，本論の対象であるカンボジア人 1.5 世の経験を理解する上で基本的枠組みとなる。

2　社会的適応と社会関係資本

移民の社会的適応について，ライアンは「資源モデル」という枠組みを提唱している。その適応の鍵は，移民が新しい社会に定住するためにニーズを満たし，生活の目標を設定し，欲求を管理するための資源をいかに調達するかにあるとする（Ryan，2008）。この資源の中には，経済的，社会的，文化的資源が含まれる。このモデルを参考にして，ベリーは移民の異文化接触―葛藤―危機―適応というプロセスにおいて，適応形態を自文化の維持と異文化の吸収のバランスの視点から「統合」「同化」「離脱」「周辺化」と分類する。これらは受け入れサイドの「多文化主義」「融合」「隔離」「排除」と対応とする（Berry 1997）。

社会学者のバウマンは，受け入れ側の対応として文化人類学者のレヴィ＝ストロースの嘔吐的方法と食人的方法を参考にして，移民を「他者化・異物化」して追放＝排除・隔離するか，あるいは移民の他者性を帳消しにして「非異物化」し，同化するという方法があるとし，さらに第 3 の方法として，移民を遠ざけて見えない存在とする「非空間」という方法があると述べる（バウマン，2000＝2001）。「非空間」では移民は単なる物理的存在となり，見えていても人間存在として認識されない。したがって，「非空間」では見知らぬ者同士は会話や交渉を必要とせず，意味ある出会いは生まれず，相互作用は起こらない（バウマン，2001＝2008）。

移民 1.5 世の社会的適応プロセスにおいて，社会関係資本が重要な役割を果たすことは広く知られている。ポルテスとルンバウトは，特にエスニック・コミュニティの役割を強調する。しかし，そのコミュニティの社会関係資本が有効に働くためには，メンバー間の絆が強く，信頼[3] 関係が構築されているという前提が必要であると述べる（ポルテスとルンバウト，2001＝2014）。パットナムは社会関係資本を，個人間のつながり，すなわち社会的ネットワーク，及びそこから生じる互酬性と信頼性の規範と定義し，その機能として結束型と橋渡し型があるとする（パットナム，2000＝2006）。前者は安定しているが同質で閉鎖的な共同体を，後者は不安的であるが異質性を持つ開放的な共同体をイメージさせる。エスニッ

ク・コミュニティは，メンバー間の親密性が強い反面，閉鎖的になる傾向がある。移民がエスニック・コミュニティに依存しすぎると，異質な他者とのつながりが希薄となり，社会関係資本の選択可能性を狭めることになる危険性がある。

3　日本における移民 1.5 世と先行研究

1970 年代後半から来日した外国人をニューカマー（新移民）と呼ぶ。これは戦前の日本の植民地支配に関連して戦後も日本に定住せざるを得なかった人々をオールドカマーと呼ぶことに対比させた呼称である。1970 年代から 90 年代にかけての新移民には，インドシナ難民（ベトナム，カンボジア，ラオス），日系中南米人（ブラジル，ペルーなど），フィリピン人，イラン人などが主に含まれる。

移民の子どもである 1.5 世の人口状況を概観・推定するために，その絶対数ではないが 5 歳から 14 歳までの外国人人口状況の推移を見てみる。図 1 を参照すると，1974 年から 2015 年の人口数は約 13 万から 15 万人と増加傾向にあるが大きな変化はない。しかし，その国籍の割合は大きく変化する。1974 年に 88%（総数 131,076 人）を占めていた韓国・朝鮮国籍[4)]の子どもが減少し，代わって中国，フィリピン，ブラジルなど新移民の子どもが増え，徐々に「その他」の国籍が増えていく。さらに，2010 年以降になると「その他」の国籍の割合は 28%（総数 153,245 人）に達し，多国籍化がすすんでいる状況が見て取れる。

本論の対象であるカンボジア人 5 歳から 14 歳の人口の推移を図 2 から見てみる。カンボジア人口は外国人人口の全体から見ると非常に少ないが，1974 年には 4 人のみであったが，

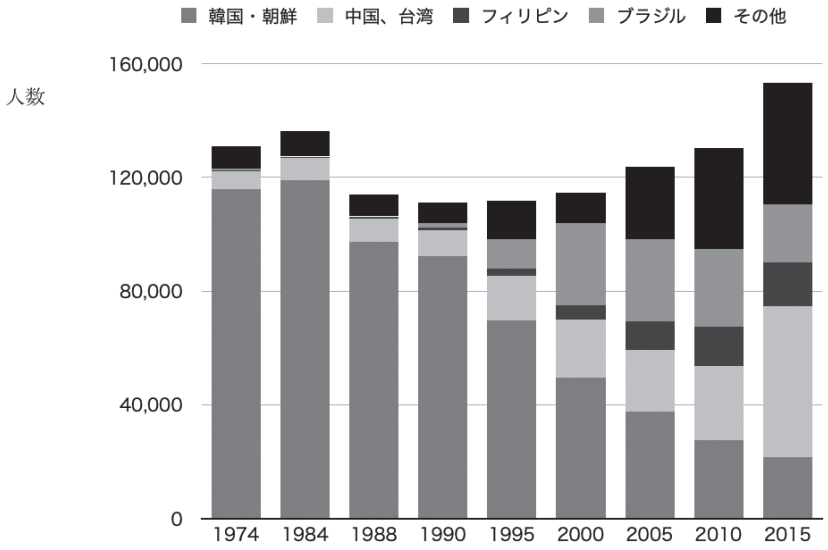

図 1　年代別，国籍別　外国人人口（5-14 歳）の推移

出典：在留外国人統計（法務省）より筆者作成。

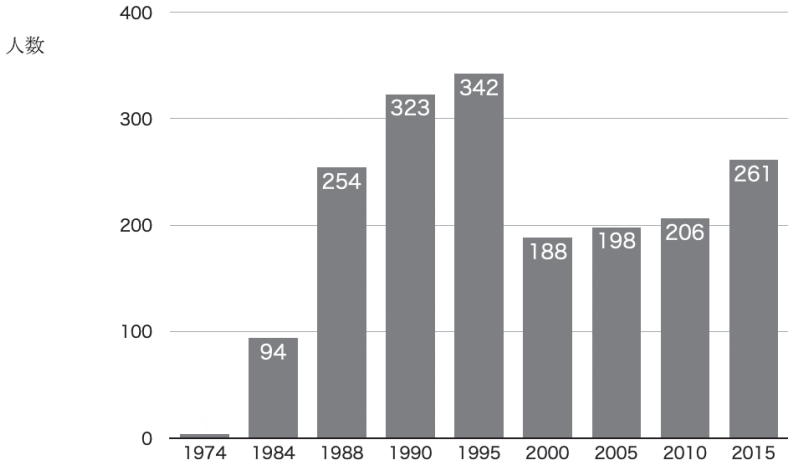

図２　年代別，カンボジア人人口（5-14 歳）の推移
出典：在留外国人統計（法務省）より筆者作成。

1984 年からいっきに増え，1990 年に 323 人，1995 年に 342 人とピークに達する。この中に本論の調査対象者である 1.5 世が含まれる。カンボジア人 1.5 世の増加は多国籍化する外国人 1.5 世の増加と重なる。

新移民の来歴は様々である。定住を許可され来日したインドシナ難民，労働力として日本政府が受け入れを促進した日系ブラジル人，エンターテイメントとして興行ビザで来たフィリピン人などである。それら新移民の子どもである 1.5 世の状況や経験は，親の来歴や日本における立場から大きく影響を受ける。

志水らは，1990 年代の新移民の子どもの学校適応について調査を行い，彼／彼女らの向学心や学力レベルが学校文化（同質性，標準化）や家族状況（家庭の価値観，伝統文化の維持，親子のコミュニケーションなど）と深く関係することを明らかにした。また，家族が来日の経緯・移動の動機をどのように意味づけ，日本での生活目標や志向をどこにおいているかといった「家族の物語」も，子どもの適応に影響を与えるという。例えば，出稼ぎ型の日系ブラジル人家族は日本での生活を一時的な滞在と捉えているため言語習得に熱心になれないが，危険を逃れてきたインドシナ難民は日本での生活に安住を求め，定住のための努力をする（志水ら，2001）。

教師と児童との関係について，教師は外国人児童の「異質性」を見ようとしていないと志水は指摘する（志水ら，2001）。児童の学習の遅れや不適応な振る舞いを個々の家庭や個人の性格によるものだと片付けてしまい，学校や社会の構造的な問題であることを認識していない。このような態度は，日本語学習においても見られる。大谷は，日常会話を使いこなせる児童を，教師が「日本語を習得した」とみなし，適切な日本語学習支援ができていないと指摘する（大谷，2013）。榎井は「日本語を話せれば問題ない」という教師の態度が，学習

言語としての「日本語」につまずく子どもに自己責任を負わせていると指摘する（榎井，2001）。これらの問題は，移民の子どもの差異を無視して，他者化することであり，バウマンのいう「非空間」に児童を置くことになる。

出身地と移住先の二つの文化の挟間に位置する移民 1.5 世にとって，アイデンティティの形成は重要な課題である。志水らは，二つの準拠集団の間でアイデンティティの揺らぎを経験する 1.5 世が，それなりの方法で自己統合をはかろうとすることを提示した。そのアイデンティティは状況によって，複合的かつ流動的な性質を持つ（志水ら，2001）。森田は，日系ブラジル 1.5 世が自分のエスニシティを利用して同級生との互恵関係を作り，自分にとって心地よい環境を作ることでアイデンティティを形成したり，あるいは他の児童を排除することで自己防衛をはかるアイデンティティ・ポリティックスを行ったりする事例を紹介している。周囲の教師や日本人児童がブラジル人児童の異質性を「ブラジル人らしさ」として許容し，時には個人的傾向も文化に還元して，教室内で異文化コミュニケーションがはかられるというポジティブな解釈がなされている（森田，2007）。三浦は，在日フィリピン人 1.5 世の事例から，エスニック・コミュニティ（カトリック教会）や地域の組織（学習教室）への関与が，彼／彼女らの流動的でハイブリッドなアイデンティティ形成を促すことを明らかにし，多様なネットワークや育ちの場を持つことの重要性を示す（三浦，2015）。

以上見てきたようにこれまでの 1.5 世の研究の中心は，その子ども時代にあり，学校・社会における適応の困難な状況を取り上げ，いかに環境を整えていくかが主要な問題関心であった。それらの多くは，研究者側の視点に立った分析が中心となり，教育分野などでの政策提言に繋がり，制度面での改善を促進させた。しかし，移民 1.5 世のより長いライフサイクルを通した生活世界についての研究は多くない。子ども時代の経験は重要な人生経験であるが，それは一部であり，時とともに変化する。在日韓国・朝鮮人 2 世の生活史の研究を行っている橋本らは，幼少期の記憶や思いが時代状況やライフステージとともに変化していくことを指摘する（橋本ら，2021）。

1980 年から 90 年代に子ども時代を過ごした移民 1.5 世は，約 30 年を経て，今や地域の社会構成員として活躍している。その成人となった移民 1.5 世は，これまでの過去を自身の視点で振り返り，意味づけ，また現在や今後の構想を他者に語れる年齢になっている。そこで，本論ではこれまでの「困難な状況にある外国人の子ども」という視点から，「さまざまな経験をへて，生活の知恵を獲得し，自己を形成し，新しい文化を作り出す人」として捉え，彼／彼女らの生き方を学んでいく。

4 「希望メソッド」という視点

移民 1.5 世の生活の知恵に注目するときに，宮崎の提唱する「希望メソッド」という概念が有用である。なぜなら，「希望メソッド」とは，知の方向転換であるからだ。知の方向転

換とは，より良い生を求めて，他者と関わり，新たな関係と自己を発見・構築していくプロセスでもある。その生き方と自己は固定されず，常に変化し続ける。その変化の原動力が，知の方向転換＝希望である（宮崎，2014）。宮崎は，エルンスト・プロッホの『希望の原理』を参照し，希望を，〈まだ―ない〉存在と定義する。「希望メソッド」は，過去にあった〈もう―ない〉ものを求める生き方ではなく，未来の〈まだ―ない〉ものに向かう生き方である。それはまた，過去と断絶するのではなく，過去との連続の中に生まれる。

宮崎は，「希望のメソッド」の要素として，不確実性，落胆・失望，主体的行為，時間的ズレ，反復をあげる。つまり，不確実な状況の中でリスクをとり可能性を求めて，ある具体的な願いを実現するために周囲に働きかけ，他者との関係を構築し，物事を形作っていくが，必ずしも生じた結果が願い通りではなく，落胆することもあり，一時停止の状態に陥るが，その停止期間は内省と新たな知の生成に繋がる。新しい知は新しい自己の発見，それは世界の見方を学ぶことであり，生き方の方向の転換につながる。学び取ったこのプロセスは，状況や内容が変わったとしても反復される（宮崎，2014）。プロッホは，希望は，閉じることのない「円環の中の円環」にあり，弁証法的，唯物論的に存在すると述べる（ブロッホ，1959＝2012）。

宮崎は，先住民系フィジー人（スヴァ人）の土地返還を求める試みを「希望メソッド」の事例として論じる。フィジー諸島は 1874 年にイギリスに植民地化され，その首都建設のためにスヴァ人は祖先伝来の土地を収奪され，他所へ移住させられた。スヴァ人は，その後 100 年にわたって，奪われた土地の補償金を政府に請求したが，拒否され続けた。スヴァ人にとって，補償金の要求は単なる金銭的利益ではなく，祖先が残した「あなた方のためにある多額のお金」という言葉を実現するという使命なのである。“氏族”ごとに土地が登録された公的文書は政府が保管しており，スヴァ人はその情報にアクセスできず，自己の知識から疎外された。スヴァ人の文書公開の主張を政府は「無知」として，無視し続けた。政府による力の剝奪である。スヴァ人は単なる請求から戦略を変え，複数の氏族が共同して報告書を作成し，その中に政府に対する一連の質問を提示した。この質問という形式が，それまで常に政府からの質問に答える立場にあったスヴァ人を質問する側とさせ，政府に答えさせるという関係の逆転を起こさせた。このことにより，それまでスヴァ人を見下していた政府の態度が変わり，土地所有の再審議を約束した。審議の結果は，所有の最終決定は第 3 者に委託するというものだった。この結果は，必ずしもスヴァ人が願ったものではなく，再び新しい不確定性の中に入った。しかし，それは再び希望の実現に向かって歩み出す瞬間でもあった。スヴァ人の自己知識への真理の探究はこのようにして続く（宮崎，2014）。

「希望メソッド」における知は抽象的な知識ではなく，具体的な状況における知識である。人類学者のティム・インゴルドは，「後ろを見ることよりも前方を見ることの方に，過去を振り返るよりも物事を予期することの方に，何かを発見する道は開かれている」と述べ，さ

らに「計画や予測に応えることから遠く離れて，希望と夢の中で，その手は物事と出会う」と述べている。これは，宮崎の「希望のメソッド」に共鳴する（インゴルド，2017）。ちなみに，インゴルドは，「知識」と「知恵」を区別し，知識は獲得することにあり，知恵は学ぶことにあると述べる（インゴルド，2020）。

本論では，未知の世界に突然放り込まれた移民 1.5 世が，その不確実性な状況の中で生き抜く様子を「希望メソッド」という視点で見ていく。

5　カンボジア人 1.5 世の背景

本論が対象とするカンボジア人 1.5 世は，1980 年代から 90 年代にかけて来日したカンボジア難民につながる人々である（定住難民の家族呼び寄せによってきた人を含む）。彼らの親世代は，祖国での繰り返される戦争の歴史，アメリカ軍による空爆，ポルポト政権下での強制労働や家族分離，内戦による社会の混乱という状況の中で国外への脱出を決意した。しかし，当時子どもであった 1.5 世はなぜ祖国を離れなければならないのか，なぜ他人の国で暮らさなくてはならないのか，理解できないまま，他人の国に避難した。親から脱出の状況やその背景が説明されることは少ない。親世代の多くは，ポルポト政権下で思春期をおくり，強制労働させられ，適切な教育の機会を奪われ，家族分離によって家庭内での教育も受けられなかった。そのために文化的資本も十分に持っていない場合が多く，ベトナム難民 1.5 世の親と比べると学歴は低く，家庭内での民族教育への関心も低いという調査結果がある（内閣官房，1997）。このことは，カンボジア系 1.5 世の学習環境や進学・進路に影響を及ぼし，また，親子の価値観の違いや葛藤の原因にもなる。

カンボジア人 1.5 世が来日した 1990 年前後は，東西冷戦構造が終結し，経済のグローバル化と新自由主義が勢いを開始した時期である。日本でも，経済界からの安い労働力の要請に政府が応じ，外国人労働者が急増し，「多民族社会」が予見される中で「内なる国際化」が議論され，「多文化共生」が謳われるようになる。後期近代と言われるこの時期は，社会の流動化が進み，人々が「原子化・個人化」していく時期でもある（バウマン，2001）。このような，社会の変動期に 1.5 世は来日した。それは，彼／彼女らの生活にとってプラスにもマイナスにもなり得る要因であった。プラスの面としては，外国人への支援活動が盛んになり，学校での国際教室やボランティア団体による学習支援などを受けることができたこと，マイナス面としてはニューカマー外国人労働者の一員として低賃金の単純労働市場の枠組みに取り込まれていったことなどがある。

なお，上記の「多文化共生」の経緯については，その源泉は 1960 年代から始まった在日韓国・朝鮮人 2 世や 3 世の日本社会に対する反差別運動の歴史にあると言われる（栗本，2016）。その後，1995 年の阪神淡路大震災を契機に「多文化共生」の言葉が普及し，地方自治体の施策となり，2006 年には政府の外国人政策文書として公表されるに至る。一方で，

行政に取り込まれた「多文化共生」は構造的な差別を隠蔽しているという批判もある（河合，2016）。「多文化共生」の変遷とカンボジア人 1.5 世の定住化の時期が重なっていることや，戦前の植民地時代から続く在日韓国・朝鮮人差別がニューカマーへの差別につながっていることも見逃してはならない背景である。

第２章　カンボジア人 1.5 世のライフストーリー：「希望メソッド」の視点から

本項は，在日カンボジア人 1.5 世が異質な他者との関わりを通してどのように生きる知恵を身につけていったのか，どのように「希望メソッド」を実践したかについて，P さんのライフストーリーを中心に論じていく（他の 1.5 世や関連する人についても，随所で取り入れる）。P さんは，1980 年にカンボジアで生まれ，5 歳のときタイへ脱出し，1993 年に一旦帰還するが，1994 年に父と妹と三人で来日し，定住する。P さんへの聞き取りは，2019 年 1 月 16 日に第 1 回（約 2 時間），2021 年 11 月 21 日に第 2 回（約 2 時間）を行った。2022 年 6 月現在，日本人の夫と息子（小学 3 年）の三人で暮らす。なお，本文中〈***イタリック文字***〉の部分は，P さんの語りの引用である。

1　祖国を離れる：不確実性と希望

1980 年にカンボジアの首都プノンペン郊外で生まれた P さんは，内戦の混乱の中，5 歳の時に家族に連れられて隣国タイに脱出した。まず国境手前のバッタンバン州の親戚の家を目指し，そこからタイ国境まで闇夜の森の中を歩いた。

〈夜中に何時間歩いたかわからないほど長い道のりで，森の中で寝ていると動物の声が聞こえてきた記憶が残っています。〉

安全な場所を求めて，危険と恐怖の道程を経てようやく辿り着いたタイの難民キャンプは既に封鎖されていた。「不法侵入」したキャンプ内では，常に監視のタイ軍兵士に見つからないように隠れていなくてはならなかった。見回りが来ると地下室にもぐったり，雨を溜める甕に入ったりした。

〈地下室の真っ暗な中で蠟燭をつけると，その煙がすごく苦しくて，入るのが嫌で嫌でしかたなくて，その後トラウマになってしまいました。〉

安全な場所であるはずのキャンプもまた危険な場所であった。この不安と怖れの日々は続いたが，その後，難民認定がなされ，やっと安心して暮らすことができた。

〈(難民）許可が出て，堂々と暮らせるようになって，学校にも行き出して，キャンプの生活も楽しかったですね。（中略）学校とかも公平だし，貧困さもないし，皆が平等な感じ。（中略）（キャンプでは）いろいろな新しいものがあって，珍しい物や外国の雑誌を見て，視野が狭いから，こんな場所もあるんだとか想像して。新しい情報が入ると，学校の友達に自慢したりして。〉

一般にメディアに報道される難民キャンプ生活は，貧弱なテントに住み，キャンプの外には出られず食料配給に依存するなど，物理的にも精神的にも抑圧的な状況の中で生きる不幸さだけが強調される。それは事実であるが，全てではない。国際的な支援のもとで，様々な国のNGOやその外国人ボランティアが学校や病院を運営し，そこでは人間らしい豊かな交流[5]があったことも事実である（日本国際ボランティアセンター　1990）。また，難民キャンプでは本国での社会階層による格差意識が希薄化されて，Pさんが語るように難民たちの間にある種の平等感覚が生まれたこともあった。難民キャンプで育ったPさんのようにほとんど外の世界を知らない子どもにとって，キャンプ生活が“普通の生活”であり，そこには子どもなりの喜びや楽しみがあった。Pさんにとって，難民キャンプは幼少期を懐かしむ場として，また現在の自分を育てた大切な場なのである。このことは，他のカンボジア人1.5世も同様の経験を語っている[6]。Pさんにとって，キャンプ生活の中でつらかった思い出は次のようなものである。

〈一番辛い思い出は，クラスで仲良くなった人が，第3国に行くことになって，行き先もわからず，離れたら一生会えなくなるのではないかと思うと，一週間くらいへこんでしまいました。〉

友人との別離は，移住先の連絡先がわからないことによって再会の可能性を絶たれることを意味した。二度と会えないかもしれない別離は，死にゆく人との別れに通じる。Pさんは，幼少時にすでに多くの人の死に出会ってきた[7]。その中には身近な人もいれば，通りすがりの人もいたであろう。しかし，それが誰であれ，関係が絶たれることは未来を失うことである。その絶望感をPさんは感じ取り，身体的に学んだ。

このように，Pさんの人生は不確実性の中で始まり，安全な暮らしを願って行動するが，その先には常に失望や落胆が待っていた。その中で，希望を失わなかった力は，他者との関わりにある。一方で，その他者との関わりの喪失が，絶望にもつながる。

2　本国へ帰還：失望と新たな出発

Ｐさんは，難民認定されてキャンプで安住を得たのだが，再び大きな歴史の変化によって意図しない状況へ追いやられる。キャンプ生活が 9 年を経た 1993 年，対立する政党各派とその後ろ盾となってきた大国によってパリ和平合意が成立し，キャンプにいる難民の帰還が決定された。しかし，この決定は他国への移住を望んでいた人の意向を無視するものだった。アメリカへの移住を希望していたＰさん一家もこの決定に従わざるを得なかった。Ｐさんはこの帰還を“強制的帰還”と語る。国際政治と国家の失策によって故郷を奪われたＰさん一家は，再度権力によって自分たちの未来を奪われた。そして，本国に戻ったＰさんを待っていたのは，隣人による冷たい態度だった。

〈あなたたちは，国が大変な時にあっちに行って，国が平和になったら戻ってきてずるいとか，裏切り者とか言われた。だから，タイのキャンプにいたことを隠して暮らしていたんです。〉

かつては共に暮らした人たちに深く心を傷つけられた。その背景は，Ｐさんの説明によると，PKO（国連の平和維持活動）によって土地の値段が急騰し，国民全員に配分された土地の利権をめぐって，本国にとどまった人が帰還難民に対して競争心と嫉妬心を持ったのだという。身近な隣人が異質な他者になった。それは難民キャンプで経験した異質な他者との親密な関係と対照をなすものだった。同じ共同体の人だからといって，単純に助けあう関係にはならないことをＰさんは学んだ。本国に戻った一家は，将来への展望を描くことができず，親戚が移住していた日本へ移住することを決意する。Ｐさんにとって，三度目の移動である。

〈日本に行くとき，自由に勉強できて，治安が良くて平和で，食べ物にも困らず，頑張れば結果がついてくると，いろいろと希望を抱いてきました。それまでの環境が悪かったから，前向きでいられるのかもしれません。〉

この時にＰさんは 14 歳になっていた。祖国で失望を味わった原因は，物の不足という貧しさはなく，隣人からの敵対的な眼差しという人間関係の貧しさだった。Ｐさんは自分の将来をかけるに値する場所ではないと判断したのだろう。日本への移住を決意した。そこで，発せられたのが「希望を抱いて来ました」という言葉である。

ここでは，「失望は希望の出発点である」という「希望メソッド」のテーゼが具体化される。それは，より良い生を求めるための知の方向転換である。本国にとどまるか，あるいは

他国に移動するかは，正誤の問題ではない。より良い生をどう意味付けるかという自己探究のプロセスである。P さんは，他者との親密な関係を持てること，勉強できて努力が報われることが自分にとって大切であると認識した。このようにして，世界と関わっていきたいと願った。

3　日本に来る：未知の世界と異質な他者

P さんは 14 歳になった 1994 年 10 月に父と妹と三人で，先に日本に定住していた母の家族呼び寄せとして来た。日本政府による日本語学習や生活オリエンテーションの公的支援はすでに終了していたため，何も準備のないまま突然日本という異文化社会の中で見たこともない人々に取り囲まれた。それは，まるで大海に投げ出された小さな魚のようだった。母の家に身を寄せ 1 ヶ月たった頃に，感染症（P さんによるとカンボジアにいるときに感染したらしい）で入院することになった。そこで，独学で日本語学習を始めた。P さんは日本で生きていくためにはまず日本語を習得しなくてはならないと考えたからだ。日本語の会話帳を親戚に頼んで購入してもらい，それを使って看護師の人たちに教えてもらった。ある日，病院から親戚に電話したつもりが間違って見知らぬ日本人に電話がつながってしまった。

〈(間違い電話の相手の人に)『私はカンボジアから来ました，今，Y 市で入院しています』と言うと，いろいろとやさしい日本語でゆっくりとしゃべってくれて，私は会話帳を見ながら話して，……。今思えば日本語を全然知らないで，よく話したと思います〉

P さんにとって，見知らぬ他者がどのように応えるかという不安よりも，日本語を習得して前に進みたいという思いの方が優っていたのだろう。大人であれば必要のないリスクを負うよりもそのまま謝って電話を切って事なきを得るところ，P さんはそうはしなかった。具体的な目標や願いがあるからだ。それを形にするために周囲の環境に働きかけた。そうして一歩目標に近づく。このような積極的で開放的な他者に対する態度は，その後，中学校の日本人の友人や同じ団地の日系ブラジル人に対してもとられる。P さんは，同級生たちとカラオケに行き，一生懸命覚えた日本語の歌詞で歌うと周囲が褒めてくれ，雰囲気が盛り上がり，それは同時に P さんの日本語の練習になった。また，団地のブラジル人の管理人は P さんを日本語教室に誘った。教室の子どもたちと一緒に勉強したり，遊んだりする中で，P さんは居場所を確保し，無理なく学習[8] ができた。これらは，自分の異質性をうまく利用して，自分にとっても他者にとっても心地よい環境を作るという生活の戦略・知恵と言える。

P さんの異質な他者との出会いは，次々と P さんのネットワークを広げ，新しい世界を開いていくことになる。P さんは，中学を卒業し，夜間高校に入学した。半年くらいで日本

語の日常会話は聞き取れるようになったというが，概念を理解するために学習用語は難しく，中学の教科は理解困難だった。その上，家庭の経済的事情は厳しかったので，仕事と勉強が両立可能な夜間高校を選んだ。夜間高校の選択は，自分の不利な条件ゆえの消極的選択ではなく，現実の中で自分にとってより良く生きるための積極的な判断結果であった。入学の筆記試験はできなかったが，面接試験では P さんのアピールが功を奏したという。

〈私は，日本にきて一年半ですが，これから 4 年間しっかり頑張りますから，入学させてください〉

無事に合格した夜間高校は，多様な属性の生徒が在籍し，親密な人間関係が構築された場であった。

〈男も女も，先輩も後輩も，違う国の人も，皆仲が良くて，友達もたくさんできて，先生からも好かれて，（中略）カンボジアの人も 10 人くらいいて，その中でもよくできる方だったので，他の人の勉強をみたり，書類の書き方を教えてあげたり，世話をすることも多かったです〉

カンボジア人のみならず移民 1.5 世の高校進学率は日本人に比べて非常に低い。しかし，P さんにとって高校進学は当然のことであった。なぜなら勉強こそ日本でやりたいことであり，具体的な希望であったからだ。そのために，自分の実力や経済状況を的確に認識し，高校進学に向けて実現可能な環境を整えるために周囲に働きかけた。まず中学の担当教師に相談し，推薦と面接で受験できる夜間高校を選び，面接官に対して自分の思いをアピールしたのである。P さんのこの主体的な働きかけが入学後も発揮され，周囲の同級生や教師との関係が形成され，異なる背景を持つ多様な人々がつながり合う共同体が作られた。

P さんは，異質な他者との付き合い方の知恵は昼間働く職場でも発揮される。当初パッキングや組み立ての生産現場に配置され一生懸命に働いた P さんを，日本人の上司は評価し，また夜間高校に遅刻しそうになると車で送ってくれるなど気を配ってくれた。しかし，生産現場での単純作業の繰り返しに苦痛を感じた P さんは，事務職への移動を願い，そのために学校でパソコン操作を習得し，上司に配置転換を申し出て承諾された。そのような P さんを，先に入社した同僚の日系ブラジル人家族が煙たがり，嫌がらせをした。事務職に移った P さんは周囲に気を使った。

〈自分が OL みたいに見えるのが恥ずかしくて，昼休みに皆とごはん食べるときは，事務

服のスカートから作業服のズボンに着替えていました。（中略）何か部品が足りないとすぐに（困っているブラジル人の同僚へ）持って行ったりしました〉

Ｐさんの態度によって，ブラジル人家族も心を開くようになり，最後の別れの時には花束を贈ってくれたという。この行為を，Ｐさんは次のように説明する。

〈自分は自分のありのままでやっていったら，向こうの気持ちが変わっていったんです。〉

Ｐさんの行為は，気配りしよう，あるいは良く思われたいと意識したのではなく，自分の気持ちを素直に表現したに過ぎない。こうして職場の配置転換の希望も，そして同僚と仲良く仕事をしたいという願いも，最後には叶った。Ｐさんは，自分を偽らず，他者に素直に接することが，他者からの信頼を得る何よりの手立てであることを学んだ。Ｐさんは，後日のインタビュウ（2021 年）で，筆者の「人との関係で大切にしていることは何ですか」という質問に対して，躊躇することなく次のように答えた。

〈自然体で本音で話すこと。みんなに対して裏表なく話す。たとえば，嫌なことも嫌われても言うし，偽らないで話す。〉

異質な他者との関係は，「希望メソッド」における行為主体性と関連する。つまり，自己を開き，自らが周囲に働きかける。これは，「人々が何らかの行為を行うためにアクセスし活用する社会的ネットワーク」としての社会関係資本の構築である。さらにＰさんは，この行為主体性の方法を提示した。それは「ありのままに振る舞うこと[9)]」である。ありのままに振る舞うことは，自分を通すことではなく，自己を柔軟に保ち，変化可能にしておくことである。ここに，Ｐさんの知の方向転換の鍵がある。

4　親への抵抗：親密圏の中の異質な他者

Ｐさんの異質な他者との関係は順調だったが，思いがけない人との間で衝突した。高校卒業後，躊躇することなく大学への進学を希望したＰさんは，経済的問題については高校時代に蓄えた貯金と奨学金，そしてアルバイトの収入で解決できると考えた。そして，自分の計画を親や親戚に伝えたところ，強く反対された。

〈親戚の中には，女の子なのだから，進学なんて必要ないとか，お金がもったいないとか，借りたお金をどうやって返済していくのとか，カンボジア人の悪い癖で，形式的な事ばかり言ってきた。お金を返済できるかどうか，今はわからないじゃないですか。私は，今の自分

が不十分だと思っているから，その先どうなるかわからないけれど，今の状態よりも良くしたいのだから，と言って反対を押し切りました。（中略）私は大人の言うことをはいはいと聞くよりも，なぜこうしたいかを説明して，自分の意志を伝える方が重要だと思います。〉

Pさんの価値観や規範は親のそれとの間で大きく違いが生じていた。在日韓国・朝鮮人2世の研究者である橋本は，成人として日本にきた1世は出身地で身体化した習慣や規範の延長線上で生き続けるが，2世は他からのさまざまな知を取り込んで自己の価値観や準拠枠を形成していくと述べる（橋本，2021）。14歳で来日したPさんは，思春期の敏感な時期を異質な他者や文化に触れ，新たな社会化を経て自己を形成した。Pさんは親たちの持つ伝統的なジェンダー規範や家父長制の権威といった古い体質に生き難さを感じ，抵抗した。田辺繁治は，人々は権力の支配的イデオロギーの中で生きているが，そこで困難な状況に直面した時，その生き難さを解決するために自ら動き出し，既存の規範や習慣を攪乱し，それまでとは異なる生活のあり方や人とのつながりを模索すると述べる（田辺，2008）。Pさんの抵抗は，このような抵抗の実践だった。Pさんは，ここで「自分の意思を伝えることの重要性」という知を獲得した。落胆の中から探求した自己である。

もう一点，ここで注目したいことは，親や親戚という最も身近で親密な人が，異質な他者となる経験である。それは，かつて難民キャンプから本国へ帰還したときに，同胞の隣人から差別を受けた体験と重なる。人の人との間の異なる経験は，異なる視点や立場を生み出し，それは民族や家族といった所与の属性以上に人間関係に影響を及ぼすのかもしれない。Pさんが，親の反対にあった時に相談をしたのは夜間高校の教師だった。教師はPさんの状況を理解し，推薦入学できる短大を勧め，一緒に大学まで見学に行った。目標を分かち合える異質な他者の存在が，Pさんの未来を切り開いた。

5　社会からの差別：顔の見えない他者

短大卒業を目前にして就活を始めたPさんは，日本社会の外国人に対する偏見・差別に直面する。Pさんは，求人雑誌や新聞を見て，会社に次々と電話をするのだが，カンボジア名を名乗るとすぐさま拒否の返事をされる。その数は，持っていたテレフォンカードが，束になるほどだったという。

〈もう，ノイローゼになりそうで，ショックで眠れない。（中略）短大卒業したら，自分のやりたい仕事につけると思っていたのに，思い通りにいかなくて，自信をなくした。それまで，前向きとか自信があったのに，もう肩を落として，顔も元気なくなるし，うつ病みたいな感じになって，部屋を閉めて泣いたり。国籍がカンボジアというだけで面接さえも受けさせてもらえない。面接までいけば，今までの自分の頑張りとかをアピールできるのに，門前

払いされて。日本語が日本人より出来ないから，日本人を使ったほうがいいのかと，向こうは思ったのだろうし。カンボジア語が出来たって，何の役にも立たないって思いました。何か，全然出番がないと，思いました。〉

あからさまな日本社会の外国人排除や人種差別に直面し，Ｐさんの希望は一気に崩れていった。それはＰさんが個人で解決できる問題ではなく，社会構造の問題である。そこでは，これまでの知が役立たず，抵抗のすべもなく，部屋で泣くことしかなかった。そして，引きこもっている間にＰさんは考えた。

〈（カンボジア名を名乗るだけでことごとく就職面接を拒否されて）前向きとかには自信があったのに，もう肩を落として部屋に閉じこもって泣いていました。なぜカンボジア人というだけで面接さえも受けさせてくれないのかと。……カンボジアの国籍だから，カンボジア出身だから，ダメですと言われて，だったら，私が日本人だったら，面接受けさせるのって。カンボジア人ということだけで判断するのって，どうなのって。日本人は心が狭いと思いました。カンボジア人の出番はどこにあるの，活躍できる場所はどこって。（中略）日本語とカンボジア語を使って，海外協力の仕事とかしたいと思ったのですが，日本語も中途半端で，カンボジア語も13歳で出てきたから，中途半端で，全部が中途半端で。何が一番得意なのかと聞かれても，答えられなくて。全部中途半端で，モヤモヤした感じでした〉

Ｐさんは人間に対する評価や価値について，人が生きる意味や居場所について考え，さらに自分は何をしたいのか，どのような能力を持っているのか，自分の現在の状態はどのようなものか，自分は何者かについて考えた。この引きこもりの期間は，無為の時間ではなく，深く自分を探り，新たな知を生み出す時間となった。宮崎は，「希望のメソッド」の重要な要素の一つに，「一時停止」をあげる。一時停止は，世界に働きかけることを止め，その効果を静かに待つ瞬間であるという（宮崎，2009）。また鷲田は，待つことは時間との折り合いであり，何かへの予感も徴候もない中で待つことは，何事かを招来することを解除することであるという（鷲田，*2006*）。Ｐさんの引きこもりは，その意味で「待つ」時間だったのだ。このような「待つ」あるいは「停止する」という受動的な行為もまた，希望の重要な側面であると宮崎は述べる（宮崎，2009）。

引きこもりの間に，Ｐさんはどうしたらこの閉塞状況から抜け出せるか，未来に向かう次の一歩を踏み出せるかを考えた。そして，カンボジア名で就職の面接を断られるのならば日本名を使えばよいということを思いついた。日本名を用いなければならないことは，日本社会の外国人差別の象徴的問題であるが，この目前に迫る課題解決に対して，その理不尽性を

飲み込んで妥協・譲歩する外国人が多い。これは，生きるための戦略であり，差別を容認したわけではない。P さんは，この戦略を用いてある会社に入社することができた。しかし，その会社で次なる差別に出会う。

〈(社長が）東南アジアに人だから，お金を出せばなんとかなるではないかと，変なことを考えて，仕事が終わった後に食事に行こうとか，物を買ってくれたり，そういうのが嫌で止めました。〉

ある意味で典型的な日本人男性による性差別と人種差別である。P さんは，このような事例を他の人から頻繁に聞いていたので，即座に退社を決めた。これもまたP さんの問題ではなく，社会の問題である。しかし，日本では当たり前になっているこのような事件に対して，その時のP さんはこのことに無意味な時間とエネルギーを使う必要はないと考えたのだろう。さっさと退職した。このように身を引いてしまう外国人女性が多いのが現状であり[10)]，それに気が付かない差別者たちは同じ行為を繰り返す。

P さんの落胆や失望は，顔の見えない他者との関係から生じた。人は，その人を人間として見ていない時に，集合的カテゴリーで人を判断する。P さんの人間関係は，それまで生活の場で対面による身体性を持った繋がりを通して構築されたものが主であった。その生活の場を離れて，社会一般という領域に踏み込んだときに，降りかかってきたのが外国人排除という人々の対応だった。その根幹は，外国人の異質性そのものにあるのではなく，その人を人間として知らないから排除するのであろう。P さんは，このことを見抜いている。

〈……その人の価値や持っている価値観を見てほしい。カンボジアの人が犯罪を犯したからって，それでその国がすべて悪いとか考えないでほしい。（中略）個人個人の良さを見てほしいし，逆に難民はいろいろな国を転々として日本に来ていることを，評価してほしい。日本は平和でも，明日戦争が起きたら，カンボジア人のように強く生きられるのか，想像してほしい。今の平和が絶対に続くと誰も保障できないのだから，もし自分がそうなったときに，自分に何ができるか，乗り越えられるか，（中略）。日本人には，もうちょっと心を広く，グローバルに開いていってほしい感じです〉

排他的な社会の態度は，当事者の落胆だけでなく，当事者自身の自己否定を生み出す。具体的な願いを持っている限り，自衛としての引きこもりは内省のチャンスを提供する知の方向転換への時間である。自己否定から社会批判へ向かった。それは自己を解放することであり，社会を理解することである。

6　他者に自分を名乗る：希望の予感

退職後，Ｐさんはある派遣会社に入り電話オペレーターの仕事をした。しかし，対面で日本語を使う接客の仕事がしたくて，新たに就職活動をはじめ，電気器具の大型販売店に転職した。Ｐさんは，新しい会社で念願の接客現場に配置された。店頭に立つ販売員は名札を胸につけさせられる。それは，日本名かカンボジア名か？

〈本当は，自分のカンボジアの名前が好きで，そうやって今まで自分は頑張ってきたので，ここで日本名を使うのは嫌で，どうしてもカンボジア名を使わして下さいと言いました。（中略）　なぜ，（名前を）偽ってやるのって思ったんです。自分はカンボジアから来て，頑張ってきて，なぜ今になって日本人としてやるのって。どうして，堂々と私はカンボジア人ですと言わないで，日本人と偽ってやるのって，違和感がありました。（中略）でも，日本人にはなりきれないし。あなたはカンボジアからどうやって来たのって聞かれると，嬉しい。それをきっかけに，カンボジア人だけど，ここで頑張っていますということを，一人でもわかってくれる人がいたら嬉しいから。〉

Ｐさんは日本名を使うことで就職差別の第一関門を通り抜けたが，それは戦略であって，本心ではない。人は，危機的状況の中で自分にとって真にかけがえのないものを発見するという（クライマン，2011）。Ｐさんにとって，カンボジア名はそのかけがえのないものだった。名前は単なるモノとしての名前ではない。名前には，その人の全歴史，つまりその人間を作ってきた経験やかけがえのない出来事が刻み込まれている。カンボジア名はＰさんそのものであって，他の誰かが勝手に名付けることは，人の心への侵入である。会社の規則や社会の規範によってなされるとしても同じである。Ｐさんがカンボジア名の使用を主張したことは，他者が自分の人生を勝手に表象することへの抵抗である。それまでのＰさんの困難の多くが，大きな力によってもたらされ，それらは自分のコントロールの及ばないことだった。それに対して，この名前の一件は，勇気があれば自分から起こすことのできる一会社の制度に対する変革行為である。Ｐさんのこの行為は，また日本社会の差別的常識に疑問を呈することでもある。自分が使う名前を自分が決めるという基本的な権利は，人間の尊厳に関わる事柄である。ここで想起されることが，かつて日本が植民地化した台湾や朝鮮の人々に対する創氏改名や最近まで行われていた帰化申請する時に日本名をつけることが強制された歴史である。ここにも，日本の植民地主義は残存している。それは，日本に来たのだから日本の文化に同化しろ，あるいはよそ者は日本の「常識」に従えというマジョリティの態度である。Ｐさんは，カンボジア名を使うことを通して，自分にとってかけがえのないものを発見し，同時に理に適わない規範を維持している日本社会への向き合い方を学んだ。こうして，Ｐさんは店頭に立ち，接客の仕事が始まった。

〈お客さんは，（私が）日本人でないから怪しいんじゃないかと近寄ってこない人もいたけれど，私はカメラのこととかを一生懸命勉強して，誠意をもってやったら，お客さんに好かれて，リピーターも多くなって，名指しをしてくれたり，（中略）お年寄りのお客さんにDPE（現像・焼き付け）の説明したら，毎回来て，こういう写真撮ったよとか，カンボジアに行ってきたよとかいう人もいて〉

希望してカンボジア名の名札をつけたＰさんであるが，顧客である日本人がどう反応するか確信はなかった。不特定多数の見知らぬ顧客の中には，外国人を嫌悪する人がいることも既に学んでいるからである。しかし，見知らぬ客と直に顔を合わせて話し，丁寧に接するとによって和やかな交流が生まれた。その関係を取り持ったのは，カメラや写真といったモノであるが，そこでは無意識のうちに「外国人」という壁が取れたようだった。つまり，人と人はカテゴリーで関係を作るのではなく，直接的に関心のあるモノやコトなどを媒介にして人間らしい繋がりが生まれることが示される。少なくとも，人間が作った「カテゴリー」という抽象的な枠組みは，具体的に生きる現場では意味を持たない。Ｐさんは，カンボジアに旅行したという顧客の話に素直に喜ぶ。自分にとっての故郷であるカンボジア，帰還した時にカンボジア人から差別や中傷を受けた経験があったとしても，Ｐさんにとって大切な自己の一部であることを認識したのではないだろうか。

日本名からカンボジア名という転換は，まさしく具体的な知の方向転換であった。この生き方の方向転換は，そのまま他者との関係のあり方にも反映された。最初から保証されていたわけでないが，その結果はより良いものであった。希望の瞬間であり，自己の探究のプロセスであった。

7　異質な他者と作る親密圏：新たな自己の探究

Ｐさんは，新しい会社で上司にもその実績や人柄をみとめられ，メーカーとの交渉なども担うようになった。このように職場はＰさんにとって，ありのままの自分でいることのできる心地よい場所となった。その中で，同僚と結婚することになった。Ｐさんは夫に，なぜ自分を選んだかという質問をしたという。

「（夫は）日本人だったら興味がなかったかもしれない（と言った），（日本人でないＰさんが）どういう生い立ちで，どうやって日本に来たのか，興味があってと。私（Ｐさん）と一緒にいると世界は広いということを教えてくれると。自分（夫）は日本しか知らないから，私（Ｐさん）が小さい時の難民キャンプでの写真を見せて，ここがお寺で，ここで水をもらってとか話すと，へえーとか，すごいとか言って，興味を持ってくれた。私を通して世界を

知ると言っています。」

Ｐさんの夫は，Ｐさんとの間にある「差異」に価値を見出し，その差異とともに生きることを選んだ。Ｐさんは，これまで異質な他者との付き合いの中で，自分のありのままで接することで，相手との信頼関係を作ってきた。それが，生きる知恵であった。Ｐさんの相手もまた，相手の差異をありのままに受け取るという感受性を持つ人物だった。ありのままの誠意はありのままに受け止める受容器（能力）があって実体化していく。それは，色の発色と同じだ。ある物体に光が当たって青という波長を目の受容体が受け止めて青が認識され，存在する。Ｐさんの存在は，受け止める相手がいて，意味ある存在となった。Ｐさんに，「これまでで重要な他者は誰ですか」と聞いたところ，「夫です」と明快な答えが返ってきた。重要な他者とは，自分の存在を承認し，それによって存在を実体化させてくれる人なのだ。それは所与の属性によってではなく，自己と他者の差異の認識と尊重，そこから生まれる相互関係によって構築される。夫の母や祖母も，Ｐさんの「異質性」を楽しんでいる。息子の結婚を機にカンボジアに関心を持ち始め，カンボジアのテレビ映像などを録画しているとのことだった。そして，Ｐさんは夫の親や親戚との関係も大切している。2021 年のコロナ禍でのインタビューでは，夫の親や親戚への配慮が語られた。

〈叔母は一人暮らしでもう 70 歳くらいで，あまりお料理とかできなくてコンビニのものばっかり買っていて，それだと飽きちゃうなと思って電話でコロナの間どう過ごしているのとか聞いたら，コンビニもなかなか行けなくて，通販ばかりとか言っているんです。それで，直接何が好きとか聞かないけれど，会話の中から今ガスは使えなくて電子レンジしかないんだとか聞き取って，チンできるものをチョイスして送ってあげたらとても喜んでくれた。〉

Ｐさんは，叔母さんに直接に聞くと気を遣わせてしまうので，それとなく必要なものを探した。叔母さんは，送ってくれた食料以上に，Ｐさんの心遣いを嬉しく思ったことであろう。Ｐさんは，夫の母にもコロナ下で度々電話をかけていた。このような関わり方について，Ｐさんは次のように語る。

〈日本人は，私が思うには，なるべく人とは関わらないようにするとか，そういう癖がついていて，自分は自分，人は人っていうようで。でも私たちは，カンボジア人は人と接したいんですよね。たとえば，日本で親戚が少なくても，旦那の親戚と繋がりたいとか，バラバラじゃなくて，コミュニケーションとりたいんですよね。カンボジア人は親戚と親密で，すごく大事にしているから。その癖があって，日本に来ても，日本のお嫁さんはよくわからないのですが，2，3 ヶ月合わないと，お母さんどうですか，最近どうですか，とか。たとえ

ば台風がおきた後とか，こっちは大丈夫だったけど，そっちはどうでしたか，とか何かと気にかけて連絡してあげるんです。〉

Ｐさんの人と親密にすることを高く評価する価値観と，その価値観を持っているカンボジアの文化へ誇りが表現されている。Ｐさんは，カンボジアとの比較から現在の日本人は他者との関係が希薄であると感じているが，そこにカンボジアの文化を優位におくというような意図は見られない。ここで，注目したいことは，「カンボジア人的親密性」がＰさんの人との付き合いの基層を成しているのではないかということである。Ｐさんが「家族・親戚」という時，それは血縁や家系を意味しているのではなく，その親密な関係性を言っているのである。お兄さんやお姉さんと呼ぶ時，それはいとこもはとこも含まれる。「家族の集まり」という時，そこには隣人や友人も含まれる[11)]。

ここで実践される人間関係はＰさんの価値観の表現であり，自己の探究とも言える。それはまた，様々な異質な他者と関わりながら学んだ「ありのままに振る舞う」知恵の反復でもある。

8　子どもに生き方を伝える：希望の継承

Ｐさんは結婚し，子どもを持った。インタビュー当時（2019 年），子どもは幼稚園に通っていた。日本とカンボジアという二つの文化のルーツを持つ子どもへの思いを語った。

〈カンボジアの文字を少しずつ教えたいし，パパは日本人で，ママはカンボジア人で，あなたは両方がはいっているんだよって，教えていきます。ハーフであることを恥ずかしがらないように，それは特典であることを，両方の文化を知ることで，出来ることや得することがあることを教えていきます。〉

「両方の文化を知ることは得すること」，この言葉の中に込められた思いは，まさしく多文化共生のエッセンスだろう。それは，差異を承認させるという政治性を超えて，その差異を文化的豊さとして捉え，積極的に評価している。実際に，その差異を利点として，Ｐさんは他者と関係を作り，自己を成長させている。高校の文化祭でカンボジアの衣装を堂々と着ることは，他者に対して自己の尊厳を示す一種のアイデンティティ・ポリティックスであるが，それは同時にＰさんが「ありのまま」を生きる自身のアイデンティティであった。自分の生きてきた軌跡が，Ｐさんの存在の証であり，それをＰさんは子どもに伝えたいと願っている。

〈息子が理解できるようなったら，自分（P さん）がどうやって日本に来たか，今までの（私の）生活体験を教えて，カンボジアという国を好きになってもらいたい。カンボジアの血が入っているのだから，息子もカンボジアのためになるような人間になってほしい。でも，押し付けはしないし，興味がなければそれでもいいし，本人の選択次第で，押し付けたくはないです。〉

「息子に押し付けはしない」という言葉は，子どもを自分の分身としてではなく独立した他者として捉え，その主体を尊重していることを示している。それは，P さん自身が進学の際に親との葛藤の中で学んだ人生の知恵である。P さんにとって，夫と子どもとともに営む日々の生活は，異質な他者と作る共同性の構築でもある。一人一人が独立した主体であり，世界に同じ人間など一人もいない中で，全ての人間が異質な他者として繋がりあっていることを P さんは学んでいる。

P さんは，自身が実践した「希望メソッド」を伝えようとしている。「希望メソッド」は，日常の中で常に反復され，共同体の習慣となり，文化となって，時代や状況が変わっても方法として次世代に継承されることが示唆される。

9　できない事を楽しむ：希望を生きる条件

「今はできないけれど，明日にはできる。赤ちゃん（が言葉を覚えるの）と同じで，少しずつ慌てずにやっていけば，ひとつ覚えれば一つ言える。二つになれば二つ言える。どんどん言えるようになって，どんどん楽しくなる。できないことを楽しみにできる。今できなくても，できないままでないということがわかっているから，挫折しない。自分に期待できる。」

上記の言葉は，「困難な時に，どうやって乗り越えてきたのですか？」という筆者の質問に，P さんが答えてくれたものである。まさしく，〈まだ―ない〉もの＝希望に向かう生き方の知恵である。その知恵は，具体的な願いに向かう行為にある。ただなんとなくああしたい，こうなりたいと願っているのではなく，あるいは技術や知識を単に知ることではなく，世界に働きかける行為，生活を営む行為のプロセスから生まれる。

ここで注目すべき点は，P さんがそのプロセスを「楽しんでいる」点である。楽しむということは，主体的行為という能動的側面を持つと同時に心地よいという受動的な身体的感覚を持つ。その楽しむ感覚を通して，新たな行為へと挑戦する内的動機が生まれる。ただし，ここで確認しておきたいことは，楽しむことは他者との関わりの中で生まれるということで

ある。P さんが日本語学習を楽しむことができたのは，その先にある他者との相互理解という願いの実現にある。楽しむことは，環境との相互関係によるのであって，自己完結するものではない。だから，「楽しむ」ということは未来に向かう「希望のメソッド」の重要な条件となる。

第３章　考察：移民 1.5 世の「希望のメソッド」

1　不確実性の中で生きる

A・シュッツによれば，人々は「日常の思考」によって生きているという。「日常の思考」とは，全てがある定式に基づき予定調和された世界である。その前提は，1）生活はこれまで通りに続く　2）親や教師によって教えられた知識や伝統や習慣による規範はその本来の意味が分からずともそのまま頼みとすることができる　3）問題は一般的な処方箋を用いれば大体において解決する　4）物事の解釈図式は，集団の仲間が一様に受け入れ利用している（シュッツら，1975＝2015）。それぞれの共同体にはそれぞれの「日常の思考」がある。人が移住するということは自分の「日常の思考」から離れて，移住先の「日常の思考」の中に入っていくことである。それは，移民にとっては「非日常の思考」の領域である。

来日したカンボジア人 1.5 世は，「非日常的思考」を持つ異質な他者に囲まれ，何が起きるか予想できない不確実性の世界に身を置く事になる。日々出会う出来事に対してどう対処するか，出会った人とどう交渉するか，そこには何も処方箋がない。全てを一から自分で考えなくてはならない。通常であれば，その不確実な危機的状況にある 1.5 世を支え，導いてくれる親もまた，同じ非日常の世界に身を置いているのだから，1.5 世は日本社会の中で孤独な小さな冒険者として課題に挑戦していく。

P さんの人生は，もともと不確実性の中から始まった。安住の場であるはずの故郷は混乱の中にあり，脱出した先の難民キャンプは一時的な滞在場所であり，意向に反して帰国した祖国では人々の様子が変わっていた。これらの状況は，P さんの個人的な選択の余地のない外部の状況によって生じたものである。しかし，日本への移住は，P さんにとって，自ら選び取った道である。それは，大きな不確実性に満ちた世界であるが，その世界はそれまでの不確実性の世界と異なるものがある。それは，希望である。***〈日本に行くとき，自由に勉強できて，治安が良くて平和で，食べ物にも困らず，頑張れば結果がついてくると，いろいろと希望を抱いてきました。〉***不確実性の世界のリスクを引き受ける鍵は，〈まだ―ない〉存在を追い求める力（希望）である。不確実性の中で生きることは，このリスクと希望のバランスである。

リスクが外的条件によってもたらされるとすれば，希望は当事者の主体的行為によってもたらされる。移民 1.5 世にとって，最も大きいリスクは異質な他者との関係であろう。P さ

んは，この異質な他者との関係をどのように構築していったのか。それは，P さんの日本社会で生きるためのリスクマネージメントとも言えるし，同時に新たな可能性へアクセスする資源（社会関係資本）の獲得プロセスとも言える。

2　異質な他者との共同性の中で生きる

日本で言われる「多文化共生」において，「共に生きる」とはマジョリティが移民や難民などのマイノリティを受け入れて共に生きることを意味する。移民や難民は，マジョリティが規定した「異質な他者[12)]」としてのマイノリティとなる。また「社会的適応」という概念は，移民がマジョリティの文化・社会に適応することを意味するのであって，マジョリティが移民の文化に適応することは含意されていない。この一方通行の関係性に縛られている限り，移民 1.5 世は移住先の社会で自分の居場所を見つけることはできない。そして，マジョリティとマイノリティが共に生きることは不可能である。このマジョリティ中心主義から脱して，移民の視点で日本の社会を見ていくための一つ方法が，本論が採用した移民の語りを聞くことである。

P さんは，来日前に「異質な他者」と出会っている。タイの難民キャンプにいたときに世界各国からの援助関係者やボランティアとの親密な交流があり，彼らが持ち込む多様な文化に触れ，世界に目が開かされたとその高揚感を語っている。この関わり合いがキャンプという閉鎖された社会の中でも，P さんを解放し，明日を生きる糧となった。このような経験は，同じ 1.5 世の N さんも持っている。それは，当時 NGO（非政府組織）という形で難民支援活動に関わった人々が実践の中で生み出した思想[13)]，キャンプの中で醸成されていった国籍や人種を超えた人間同士の関わりという思想である（日本国際ボランティアセンター，1990）。一方で，キャンプから本国へ帰還した時に，P さんは同胞である隣人から差別され，社会から疎外された経験を持つ。この二つの経験は，「異質な他者」は単純に出自や文化の違いによって規定されないことを示唆的している。P さんにとって，国籍や人種が異なるボランティアたちは「私の仲間や友人」となり，同じ民族の隣人が「異質な他者」になってしまった。つまり「異質な他者」は，出自やカテゴリーによってではなく，関係性に規定されるということである。しかし，この関係性の背景には様々な要因が関係する。例えば隣人の排他的な態度は，カンボジア国内に駐留する国連平和維持軍のために国民に分配された土地をめぐる利害が影響していた。もし状況が異なっていれば，隣人たちは P さんにとって昔通りの親密な仲間あったかもしれない。状況によって「異質な他者」と「親密な仲間」は変わり得るのだ。

では，「異質な他者」が「親密な仲間」に変化するのはどのような状況か。P さんの来日後の事例を見てみよう。団地の日系ブラジル人の自治会長は新入りの P さんを気にかけ，世話をして，日本語教室を開催してくれた。定時制高校では，国籍，年齢，ジェンダー，職

業の異なる学友たちが相互に支え合って共に学んだ。職場の日本人上司は仕事と学校の両立に忙しいＰさんを支えた。Ｐさんにとって，困難に直面した時や一人では問題を解決できない時に，共に考え，共に行動する人が「親密な仲間・友人」になった。このような相互関係は，偶発的に，内発的に生まれる。なぜなら，困難を抱えた人を目の前にしたときに，その人の属性は後景化して，「異質な他者」であるかどうかは意識の外にいってしまうからだ。つまり，唯一無二の存在である人間同士の間に回路ができた時に「親密な他者」となり，回路がつながらない場合は「異質な他者」となる。この回路がつながる関係を「共同性」と呼ぶことができる。

では，「共同性」とは何か。かつての閉鎖的な地域共同体においては，所与の同質な文化や規範がそのつながりの核にあった。同じ集団に属していれば，個々の人同士もわかりあえるという前提である。ここでは，「共同性」と「同質性」が同じに捉えられている。しかし，一人ひとりの人間はそれぞれが異なる唯一無二の存在である。この前提にたてば，所与の「同質性」というものはない。小田はローカルな場では，同質性・同一性に基づいたつながりではなく，関係性から生じる隣人同士の相互関係に基づいた社会的連帯＝「共同性」が生まれると述べる（小田，2010）。インゴルドは，国籍や民族の異なる人々が作る「共同性・共同体」とは，出自によってではなく，関係性によってつくられると論じる（インゴルド，2017）。つまり，「共同性」は他者と何かを初めから共有するものというより，他者と何らかの回路・コミュニケーションを持つことによって，結果として部分的に何かを共有することではないか。回路は，具体的なモノやコトを介して作られる。Ｐさんの場合であれば，日本語学習や高校のスピーチコンテスト，職場での仕事を契機に他者とつながる回路が開かれた。「共同性」とは，このような個人のレベルで作られた社会的繋がりであり，それが絡み合い，多岐に広がりある集合的凝集[14] が起きると「共同体」となるのだろう。そこでは，唯一無二の存在である他者同士がその異質性を保ちつつ分離し，同時にある部分で結合するという両義性を持つ集合体が形成される。

Ｐさんが「異質な他者」と結合するための回路・コミュニケーションには，二つの形が見られる。一つは，「自分のありのまま」で接する方法である。自分が自己と認めるアイデンティティを信じ，その自己を偽らずに他者に対する態度である。利害を除外した誠実な対処の仕方である。この方法においては，自分の行為に対して自覚的であり，ゆえに行動の結果に対して自ずと再起的・内省的になる。たとえば，Ｐさんは，日本名を使って入社した会社で念願の販売員として現場に立つことになった時，会社に日本名でなくカンボジア名の名札をつけたいと要求した。それは，カンボジア人として頑張ってきた矜持であり，日本人と偽ることは自分への裏切りになると考えたからだった。顧客が自分を遠ざけるようなこともあったが，誠意を持って接していったら名指しする人が出てきたり，カンボジアのことに関心を持つ人が現れたりした。ここでのＰさんと顧客の関係は，相互に「異質な他者」が「親

密な他者」に転換した瞬間だ。P さんは，このような出来事を自身の行為の結果として振り返り，他者との関係の方法として学んでいる。

もう一つの形は，目の前の障壁を乗り越えるためにうまく立ち回る戦略的方法である。この方法は，自分のありのままではなく，意識的に相手の状況に合わせて自分を振る舞うことで無意味な摩擦を回避し，生産的な回路を開くことである。結果として相手を自分の土俵に取り込むことを可能とする。例えば，自分を仲間外れにしたブラジル人の同僚に対して，敵対するのでも無視するのでもなく，相手の気持ちや立場を汲み取って不足の部品を持っていって助けたり，自分の事務服を相手に合わせて作業服に着替えたりなど相手に負担とならない気配りをすることで相手の気持ちを和らげ，結果として相手の態度が変わり，親密な関係が構築された。また就活の際，会社に電話するときに日本名を名乗ることで，面接の機会を獲得した。これらは，自分を偽ることではなく，また相手を騙したり蔑ろにしたりすることではない。マイノリティに対する障壁を越えるための生存上の戦略であり，理不尽な社会慣習への抵抗とも言える。

P さんのこのような生活の知恵は，単に P さんのコミュニケーション能力を向上させるにとどまらず，社会にも波及していく可能性がある。たとえば，P さんが対応した顧客は，P さんとの親密な交流の経験を次に出会う「異質な他者」に適用するかもしれない。また日本人同僚は，P さんの顧客への対応を見て「異質性」が功を奏して生まれるサービスの価値を見いだし，会社の人材方針を見直すかもしれない。同僚の日系ブラジル人は次に入社した新しい同僚に対して親しくアプローチしていくかもしれない。一人の行為の結果は微細であるが，その影響は当事者が思っている以上に大きいかもしれない。P さんの実践は，国籍や民族という境界を超えて他者が繋がるための種を社会に撒いていることになる。

次に，P さんが異質な他者と共同性を構築した鍵を探る。それは，P さんを取り巻くカンボジアの文化，特に家族や親族といった親密な関係に関連する。

3　親密性と開放性の中で生きる

親密性によって構築される集合体を親密圏と呼び，その代表格が家族とその地域集合体としての共同体である。「血」や「法律」，あるいは規範的な「イエ」を媒介として存在した家族という制度は，相互扶助という経済的機能や安心や癒しといった情緒的機能を提供していた。しかし，グローバル化と共にそのような家族や共同体は崩壊し人々は繋がりを失ったと言われる（山田，2001）。東は，家族は「家族と家族でない者」を明確に分け，「家族員同士は助けあうが，そうでない者は助けない」という原理によって外との境界線を作る一方で，家族をメタファーとして会社を「大きな家族」と見做し社員が一丸となって働き生産性を高めるような効果もあると述べる（東浩紀，2022.1.8 朝日新聞朝刊）。家族というメタファーを利用して，戦前の帝国日本が天皇を親とし国民を子どもとして想像の共同体を作り上げ，

アジア諸国の他者を抑圧した歴史もある。つまり，「家族」という言説を用いて，集合体内部を結束させることも，他者を排除し分断することも可能である。斎藤は，親密圏を「具体的な他者の生／生命に対する関心／配慮を媒体とする関係性」と定義する一方で，同質的な親密圏は異質な外の世界を断つこともあるので，外の世界との回路を担保することが必要であると述べる（斎藤，2000）。このような「家族」の言説を踏まえて，カンボジア 1.5 世とその家族はどのような親密圏を持っているのかを考察する。

カンボジア人 1.5 世にとっての家族の概念は，単に血の繋がりというだけではなくもっと広い人間関係を含む。P さんの事例で見た通り，カンボジア人が家族や親戚の集まりというときに参加する人は，隣人や家族の友人や遠路からの客も入る。そこに厳格な境界はない。「家族や親戚の集まり」という名のもとに，さまざまな人が集い，共に食事し，おしゃべりをする時間をもつ。その会合には毎回参加する人もいれば，一回きりの人もいる。出入り自由で，事前の約束も必要ない。人々はそれぞれが適当に持ち寄ったおかずをゴザの上に置き，それらを囲むように自然と車座になって座る。椅子があるわけでないから，飛び入りの人が来ても適当に場所を開けて入るだけで済む。参加する人にとっても受け入れる人にとっても何の支障も来さない。このやり方は，カンボジアでは当たり前の習慣，つまり一つの生活文化であったから，一世はそれを日本でも実践し，会合に参加する 1.5 世や 2 世も特に教えられることなく自然と身につけていく。P さんは，筆者が参加したカンボジア人の集まりで，「こんなふうにカンボジア人は誰でも歓迎して，仲間に入れるのが好き」と説明し，隣にいた若い女性は見知らぬよそ者である筆者にいろいろなおかずを新しい皿に盛って自然に手渡してくれた。筆者の観察から，参加者たちは，このようなカンボジア風のやり方を好んで実践している様子がうかがえた。この様な実践が，日常の人間関係の構築のあり方にも影響を及ぼすだろう。それは，異質な他者とつなぐ回路を持ったカンボジア的親密性と言える。

カンボジア的親密性は閉鎖的でなく，開かれている。このような親密で開放的な関係を「家族の関係」として捉えている P さんにとって，夫のお母さんや叔母へのちょっとした心配りは，身体に染み付いた習慣なのだろう。カンボジア難民として来日した一世は，本国では教育を奪われ，家族を分離させられ，伝統的な共同体を破壊させられ，民族文化を奪われ，文化資産を何も持たずに来たように思われる。しかし，そのようなことはなく，家族関係のあり方は身体的習慣として一世に維持され，さらにその子どもである 1.5 世にうけつがれている。それは，親が強制するような文化ではなく，人を心地良くさせ，人生を楽しくさせるものであるから，自然と日本でも実践され，再生産される。1.5 世や 2 世に聞くと，カンボジアの行事食のような料理は親のように作ることはできないという声を聞く。しかし，料理の内容や車座の形式が日本の状況によって変化したりもするだろうが，よそ者をもてなすカンボジア的親密性[15] は受け継がれていくのではないだろうか。このような人間関係のあり方は直接に社会経済的な成功に導くツールにはならないかもしれないが，人と人がつながり

調和する社会の維持と発展にとって重要な資源である。

近年のグローバル化に伴って近代社会は「個人化・原子化」され，伝統的家族や共同体が崩壊し，近代都市は見知らぬ者の集まりであると言われる。この状況は日本にも当てはまる。日本に来る移民の多くは，伝統的な社会から近代的都市社会に参入する事になる。カンボジア人 1.5 世が，カンボジア的な親密で開かれた家族関係という生活文化を日本の土壌の中で，そしてグローバル化の中で，どのように活かしていくのか，新しい課題であろう。

4　生活の中で自己を探究する

先に「希望のメソッド」は，知識の方向転換であると述べた。その知識を方向づける羅針盤は，自己を知ることである。自己を知るとは，日々の生活の中で他者とどう関わるかということの中で行われる。社会学者の A・ギデンスは，後期近代におけるアイデンティティは，日々の出来事や他者との出会いの経験から再帰される自己の物語であると述べる（ギデンス，1991）。P さんの語りから見えてくることは，次々と出会う「異質な他者」との様々な関わり合いを通して独自の知識や価値観を獲得していくプロセスである。これらの出会いの経験の積み重ねが，P さんのアイデンティティを形成する。

P さんのアイデンティティの特徴は，民族や国家などによる所与の帰属に基づいたアイデンティティによってではなく，生活経験に根ざしたものである。その核には，移民 1.5 世の子ども期の移動の経験がある。思春期というアイデンティティを形成する重要な時期に，異なる文化へ移行し，二つの文化の狭間にあって異質な他者に囲まれ，その不確実性の中でどのように振る舞い，どのように他者と交渉し，どのような価値判断をすべきかを自分で学び取っていくのである。親に教えられた伝統的規範ではなく，移住先の学校で教えられる「生活の仕方＝社会規範」ではなく，毎日の暮らしの実践の中で直面する出来事や他者との出会いを通して喜びや悲しみや怒りや悔しさを感じ，自らの身体が学んでいく。そのようにして獲得した知が積み重なって，移民 1.5 世のアイデンティティが形成される。

まとめ

P さんの語りを通して，移民 1.5 世の生き方が見えてきた。それは，子ども期に未知の社会に突然参入することよって移民 1.5 世は何の資源も持たず素手でその不確実な状況を生き抜いていかなくてはならないこと，異文化社会の中で直面する困難や葛藤を乗り越えるために多様な異質な他者との出会いの場で共同性が形成されること，その共同性構築の根底には親密で開放的なカンボジア的関係性があること，その異質な他者と協働する経験が積み重なって国籍や民族・人種を超えた生活に根ざした自己が形成されることである。

P さんは，常により良い未来を目指してきた。生まれた時から不確実な状況の中で困難に

直面し，リスクをとってより良い生活への可能性を求めて移動し，そこで出会う多様な他者との交流の中で希望を予感し，その実現に向かって行動する。しかし，行動の結果は必ずしも思い通りになるとは限らず，失望や落胆という現実に直面し，一時停止の状態に陥るが，葛藤の中で自省し，同時に社会に対して異議申し立てをし，新しい知を獲得していく。ここで，知の方向転換が起こる。この希望のプロセスは，P さんの人生のターニングポイントにおいて場所をかえ，状況をかえ，繰り返される。

本論では P さんの希望が何か，それは実現したのかどうかを考察することはしない。それは，現在でもわかりようがないからだ。ただ，確実に言えることは，P さんは，未来に向かって歩き続けていることである。それは，一直線ではなく，過去の希望を修正したり，転換させたりしつつ，未来の〈まだ―ない〉存在に向かって進む未完のプロジェクトと言える。その一瞬一瞬が，P さんの自己探究のプロセスでもあり，生きることとなる。付け加えるならば，P さんが希望の歩みを継続できる理由は，そのプロセスを楽しんでいるからである。何かのためでなく，今，この時の一瞬一瞬を生きているということである。

移民 1.5 世について，いかに移住社会に適応するかという視点ではなく，いかに新しい知恵を獲得するかという視点へ，どこに帰属するかというアイデンティティではなく，どのような人とどのような関係を構築するかという関係性に基づいたアイデンティティへと光を当てることで，「困難な状況にある移民 1.5 世」から「希望という生き方を実践する 1.5 世」というイメージへ変換できるのではないだろうか。これも，社会におけるひとつの知の方向転換と言えるであろう。

本論は，P さんという個人の生き方を記述し，分析・考察した。しかし，それは単なる P さんの個人の歴史の紹介ではなく，またその生き方を賞賛することではなく，P さんが実践している生活の知恵が一つの社会的現実であり，日本人にとっても学ぶ点が多いことを主張したい。特に，現代都市の個人化され，分断された社会の中で，日本人が他者との繋がりよりも自己の利益に価値を置く傾向にあって，異質な文化を持つ人々同士がどのような繋がり，より良い未来を共に開いていくかということへの示唆となるのではないかと考える。

注――――――――

1）学校教育を受けるということは，その国の文化や規範を身につけさせる規律化・社会化という点で，移民 1.5 世の特徴的な立場を作る意味がある。

2）分節化された同化（segmented assimilation）における「同化」の概念の基本にあるのは，移民マイノリティと受け入れ社会のマジョリティとの出会いがどのような結果をもたらすかをその事実に基づいて予測し，同時にそれが社会的に望ましい目標であると主張することにある。「不協和型文化変容」は，移民の子どもが親より先にアメリカ文化を習得し移民文化を喪失した場合，「協和型文化変容」は親と子どもがアメリカ文化を習得し徐々に母語や母国文化を捨て去っていく場合，「選択型文化変容」は親子が自分のエスニック・コミュニティに埋め込ま

れ主流文化による影響を調整し母語と母国の規範を選択的に保持する場合に起こる。「選択型文化変容」が親子の葛藤を少なくし，バイリンガルとなる可能性が高い。（ポルテスら，2014）

3）「信頼」という概念については，2種類の形があるという（山岸俊夫，2008,『信頼の構造』，東京大学出版会）。ひとつは，集団内部の均質性が高く不確実性の低い「安心」を基本とする信頼，もうひとつは多様であるがゆえに不確実性が高くリスクはあるが，それを覚悟の上で他者と人間関係を結び可能性を追求する「信頼」である。

4）韓国・朝鮮国籍について，「韓国」は大韓民国の国籍，「朝鮮」は敗戦後に日本に在住する朝鮮人の国籍欄に記載されたものであり，朝鮮民主主義人民共和国の国籍ではない。

5）難民キャンプで当時ボランティアとして活動していた人から筆者が聞いた話では，難民の家に招待されて食事を供されたり，結婚式に参加したり，子どもたちと一緒にカンボジアの遊びをしたり，日本の遊びを教えたりという。野球の試合を企画したときは，初めて体験するこのゲームに難民たちは興奮したという。

6）カンボジア人1.5世のNさんの語りでは，キャンプ内での生活は爆弾の音が聞こえるような状況にあったにもかかわらず，キャンプの生活は現在の自分を育んだかけがえのない日々であったと振り返る。

7）Pさんの語りの中に直接は出てこなかったが，Kさんの脱出の記憶の中には，祖国の内戦下で，そして逃亡の過程で遺体を見たということが語られ，自分の兄も地雷を踏んで済んでのところで死ぬところだったという。このように，難民は死と隣り合わせの経験を持っている。

8）地域のボランティアによる外国人の子どもへの日本語や学習支援の現場では，国籍，居住地域，来歴などは異なる子どもたちは，共に学び，教え合い，情報を交換し，助け合うという繋がりが生まれる。そこでは実利を超えて，励まし合う関係やロールモデルの関係が生まれる。これらの関係は，永遠を約束するような確固たる結束でないかもしれないが，緩やかで無理のない繋がりが生まれる。一時的である場合が多いが，中にはその後も続く場合もある。大切なことは，子ども期のこのような多様な他者たちと自然につながる経験がその後の人間関係を豊かにしていく可能性である。このような事例は，他の1.5世の語りの中でも度々見られる。

9）筆者がPさんに，「ありのままで付き合う」ということをどのように学んだのかと聞いたところ，少し考えた後に「お母さんがそうだった」と答えた（2020年の2回目のインタビュー）。母の姿を見て学んだ態度・生活文化の継承である。

10）この様なジェンダー・人種の複合的差別は，1.5世のNさんからも語られ，Nさんや他の1.5世から尊敬を集めているカンボジア移民の女性もその著書に明確に記述している（ポンナリット，2001）。

11）筆者が参加したカンボジア人の集まり（2021年12月28日）では，それぞれが持ち寄ったおかず（特に担当を決めるのでもなく）を車座になって皆で回して食べる。この形式は，突然の訪問客も遠慮なくその輪に加わることを可能にし，ホスト側も慌てることなく，他の客にとっても何の支障も及ぼさない。見知らぬ予定外の客が入っても，普通どおりの家族の集まりのようである。よそ者に対する壁が低いから見知らぬもの同士でも自然に会話が生まれる。これが，Pさんが言う「家族の集まり」の内実なのである。

12）他者は，自分以外は全て人間である。しかし，「他者化」するというような使い方をする場合は，「われわれ」と「かれら」という境界を引いた集団の内集団と外集団という枠組みにおいての（内集団の）帰属意識と関係する。従って，そこには包摂と排除の機構が生じる。ここで

「異質な他者」という場合には，自分が帰属する集団ではない集団の人という意味と，自分とは違う価値観や文化を持つ個人の両方を含む。つまり，カテゴリーに規定されて捉える他者と自分以外の人という意味も含む。あるいは，自分がたくさんの帰属集団を持っていて，その意味で違う集団（アイデンティティ）の個人という意味で捉える。

13）筆者自身が，難民支援活動の中で NGO が単なる国連や政府支援の補完物でなく，独自の意味と効果を持つことを実践の中から学んだ。実務者の集まりである NGO メンバーは，そのことを理論化するよりは，実践に集中していった。現在の多文化共生の理念の種は日本の外ですでに撒かれていた。その種は，後に阪神大震災のボランティア活動にもつながった。

14）個人のつながりをネットワークと称することが多いが，それは点と点が単線で結ばれたものである。人の関係は，そのような点と点ではなく，人々の生きた軌跡という線が絡み合った毛糸玉のようなものとインゴルドは述べる。（インゴルド，2020）

15）P さんが持つカンボジア的親密性は，P さんの高校時代の態度にも現れている。P さんは，日本語が不十分な学友を助けるという行為を通して，クラス内の「具体的な他者の生／生命に対する関心／配慮を媒体とする関係性」を作りあげ，異質な他者同士の親密圏を構築した。同時に，そこでは共に学びあう中で生まれてくる新しい知の生産があるという意味で公共圏とも重なる親密圏であった。

参 考 文 献

インゴルド，T，金子遊など訳（2015＝2017）『メイキング』，左右社

――――，奥野克巳訳（2020）『人類学とは何か』，亜紀書房

榎井緑（2011）「外国にルーツをもつ子どもたちのこれまでと現状」『外国にルーツをもつこどもたち』現代人文社：7-15

大谷杏（2013）「インドシナ難民 2 世，3 世が抱える学習問題と学校・地域の対応」『早稲田大学大学院教育学研究科紀要　20 号』：221-230

小田亮（2010）「グローカリゼーションと共同性」小田亮編『グローカリゼーションと共同性』，成城大学民俗学研究所：1-42

ギデンス，A 秋吉美都，安藤太郎，筒井淳也訳（1991＝2005）『モダニティと自己アイデンティティ――後期近代における自己と社会』，ハーベスト社

クラインマン，A，皆藤章漢訳（2006＝2011）『八つの人生の物語　不確かで危険に満ちた時代を道徳的に生きるということ』，誠信書房

栗本英世（2016）「日本的多文化共生の限界と可能性」大阪大学未来戦略機構『未来共生学 3』：69-88

河合優子（2016）「多文化社会と異文化コミュニケーションを捉える視点としての『交錯』」『交錯する多文化社会』，ナカニシヤ出版

斎藤純一（2000）『公共性』，岩波書店

志水宏吉，清水睦美編著（2001）『ニューカマーと教育　学校文化とエスニシティの葛藤をめぐって』明石書店

シュッツ，A，ルックマン，T 那須壽訳（1975＝2015）『生活世界の構造』，ちくま書房

日本国際ボランティアセンター（1990）『NGO の挑戦　下刊』，メコン

内閣官房　インドシナ難民対策連絡調整会議事務局（1997）『インドシナ難民定住者の現状と定住促進に関する今後の課題』
橋本みゆきなど（2021）『二世に聴く在日コリアンの生活文化 「継承」の語り』
バウマン，G／森田典正訳（2000＝2001）『リキッド・モダニティ　液状化する社会』，大月書店
パットナム，R／柴内康文訳（2000＝2006）『孤独なボーリング―米国コミュニティの崩壊と再生』，柏書房
ブロッホ，E／山下肇，瀬戸鞏吉，片岡啓治，沼崎雅行，石丸昭二訳（2012）『希望の原理　第一巻』，白水社
ポルテス，A. ルンバウト，R.／村井忠政訳者代表，（2014）『現代アメリカ移民第二世代の研究』明石書店（Portes, A. and Rumbaut R.G., 2001, *LEGACIES: The Story of the Immigrant Second Generation*）
三浦綾希子（2015）『ニューカマーの子どもと移民コミュニティ』勁草書房
宮崎広和（2009）『希望という方法』，以文社
森田京子（2007）『子どもたちのアイデンティティ・ポリティックス　ブラジル人のいる小学校のエスノグラフィー』新曜社
山田昌弘（2001）『家族というリスク』，勁草書房
鷲田清一（2006）『「待つ」ということ』，角川書店

Rumbaut, R.（1991）“The Agony of Exile: A Study of the Migration and Adaptation of Indochinese Refugee Adult and Children”, *Refugee Children Theory, Research, ana Service.*: 6
Ryan, D.（2008）“Theoretical Perspective on Post-Migration Adaptation and Psychological; Well-Being among Refugees: Towards a Resource-Based Model”, *Journal of Refugee Studies Vol.21: 1-18*